

平成 16 年 3 月の解説

【3月の週間天気予報から】——本州南岸での前線の停滞と悪天——

前線が本州南岸に停滞する気圧配置のときは、東日本と西日本の太平洋側の地方を中心に曇天が続きます。まだ気温が低いこの時期は、前線上を低気圧が進むと雨だけでなく、雪の降ることもあります。20日から26日にかけて、東シナ海や九州の南の海上で発生した低気圧がほぼ2日おきに本州の南岸を東進して、広い範囲で頻繁に雨を降らせました。各種の予測資料で曇雨天の可能性が示されていた日でも、日を特定して「降水あり」とできずに、「曇り」と予報した「見逃し」(降水なしと予想したが、降水のあった)事例が各地で多くなりました。

22日頃は東日本と西日本の全域で雨が降りましたが、7日目から4日目の予報では「降水なし」としています(この予報期間の全国平均適中率は約30%)。25日にも東日本と西日本の太平洋側の地方で雨が降りましたが、明日、明後日予報を含めて、多くの地方で見逃しています。

前線上を進む南岸低気圧の発達度合の見積もりを誤ると、悪天域の北側への広がりについての予測誤差が大きくなり、多数の府県で同時に予報がはずれるため、全国の平均予報適中率も低下します。ただ、このように降水日の特定が困難なときでも、週間天気予報では曇りで降水確率を40%と高くして、雨が降りやすい気象状況であることを表現していますので、仮に雨が表現されていなくても、降水確率予報にも留意した週間天気予報のご利用をお願いします。

【3月の天候状況及び検証結果】

上旬は強い寒気が日本付近に2回流入して、1日には南岸低気圧により関東地方で雪混じりの雨が降り、6日には日本海で低気圧が発達して日本海側を中心に強風が吹きました。中旬は日本の北側を通る低気圧に向かう強い南風の日や、移動性高気圧に覆われる日が多く、全国的に高温傾向で推移しました。下旬になると、本州の南岸を隔日程度の短い周期で前線や低気圧が東進したため、太平洋側の地方で雨の降る日が多くなりました。

このような天候状況の中で、予報期間平均の「降水の有無」の適中率は、全国平均で例年並の66%でした。地域的に見ると、東北地方では例年より5ポイントも高いのですが、南岸低気圧の通り道となった西日本などでは適中率を少し下げています。

3月の全般的な気温の状況は、寒暖の変動が大きかったものの、月平均気温は全国的に平年を上回っています。特に、北陸地方の月平均気温は平年より1.2度も高くなりました。

こうした中、最高気温の予報誤差は、全国の予報期間平均で例年値(2.8)よりやや大きい3.0でしたが、最低気温の場合は例年並の2.4でした。

【5月の天候の特徴】

5月は、移動性高気圧に覆われ晴天となり、強い日差しにより気温が急上昇して、時には真夏並の高温になりますが、上空に寒気が入れば、北日本や本州の山岳地帯ではまだ雪の降ることもあります。このように、5月の天候には冬のような天気と夏の天気が混在しており、南北に長い日本列島の天気は、地域格差が大きいのが特徴です。なお、5月における週間天気予報の「降水の有無」の適中率(3日目~7日目平均)は、平均(1992年~2003年)で68%です。

また、平年の場合、沖縄地方では5月8日頃、奄美地方では5月10日頃、九州南部では5月29日頃に、それぞれ梅雨入りします。

【週間天気予報の利用に際して】

数値予報モデルの改良や予測手法の改善を続けて、予報精度の向上を目指していますが、予報期間後半の予報ほど精度が落ちます。週間天気予報を利用される場合には、発表時に付加している信頼度を参考にいただくとともに、できるだけ新しい予報をご利用ください。